

令和元年・2年度

南薩地区研究協力校・枕崎市教育委員会研究協力校

枕崎小・中学校「小・中連携教育」研究公開

※ 個人情報保護のため、一部画像にモザイクを入れています。



研究主題

夢やあこがれをもち、自ら未来を創ろうとする児童生徒の育成
～自己有用感、自己肯定感を高めるつながりの創造を通して～

令和2年11月26日（木）
枕崎市立枕崎小学校・枕崎中学校

めざす児童・生徒の姿

つながることでこんな児童・生徒を育てたい

- 自らの課題を考え、その解決のために向上心を持ち、主体的に学習し続ける児童・生徒
- 今までに得た知識や能力を活用し、積極的に新しいことにチャレンジしようとする児童・生徒
- 友達や異学年と関わることのよさに気づき、積極的に関わろうとする児童・生徒



自己有用感,自己肯定感を高めるためのつながりを中心に

自己有用感と自己肯定感を高めることでどう変わる

自己有用感とは、他者や集団との関係の中で、自分の存在を価値あるものとして受け入れる感覚のこと。他者や集団の中で、自分は価値のある存在であるという実感や自分が役に立つ行動をしている、自分の行動や存在が認められているという実感等から構成される。

自己肯定感とは、自らの存在を肯定し、ありのままの自分を受け入れる感覚のこと。自分の在り方を積極的に評価できる感情や自らの価値や存在意義を肯定できる感情等から構成される。基本的には、自己有用感が高まることで自己肯定感も高まる。

他者や集団との関係の中で、自分に自信をもって生き生きと生活ができるようになる。例えば、自分に自信をもつことで、他者への思いやりのある行動や、他者と協同することができる。また、学習や活動への意欲が高まり、積極的に新しいことに挑戦しようとしたり、主体的に物事に取り組もうとしたりすることができるようになる。



授業や異学年交流の場で「つながる」ことで、自己有用感や自己肯定感を高め、意欲を高めたい

自己有用感と自己肯定感を高めるには

- 一人一人が活躍できる場を設定し、役割を任せ、成し遂げさせることで自分もできるとの自信をもたせる。
- 自分の力で最後までやり遂げたという達成感を味わわせる。
- 結果だけでなく、努力したことや取り組んだ態度を認め、称賛する。
- 一人では達成困難な課題に集団で取り組ませ、協力し合って課題を解決することを経験させる。

自己有用感や自己肯定感を高める効果的な手法

授業や日常生活の中において、一人一人に役割があり、達成感を味わうことができる場を設定した。授業において、ジグソー法の要素を取り入れた学習、日常生活や小・中の様々な「つながり」において、異学年での交流を取り入れた。異学年交流においては、「自分たちで企画し、運営する」ことによって、自己有用感・自己肯定感が高まるというメリットがある。つながりにおいて、「自分たちで企画、運営する」という視点を取り入れ、実践した。

研究の仮説

仮説1

ジグソー法を中心として、一人一人に役割と責任をもたせた、共に学び合うことのできる場の設定を行うことができれば、児童・生徒は、役割と責任を自覚し、学び合うことを通して友達に認められたりする中で、自己有用感が高まり、意欲をもって学ぶことができるようになるのではないかと。

仮説2

児童会・生徒会活動において、児童・生徒自身が主体的に計画を立案、実施することによる自治的な活動ができる場を設定すれば、上の学年がリーダーとなる異学年活動が行われ、自己有用感、自己肯定感が高まり、活動への意欲や新たに挑戦する気持ちをもつことができるのではないかと。

仮説3

小学校と中学校を様々な方法でつなぎ、交流を行うことによって、小学生が中学生の優れた部分に触れることができたり、中学校教師とのつながりができたりすることによって、中学生へのあこがれや中学校生活への意欲が喚起されるのではないかと。(中1ギャップの解消)



めざす児童・生徒像

- 自らの課題を考え、その解決のために向上心をもって主体的に学習し続ける児童・生徒
- 今までに得た知識や能力を活用し、積極的に新しい事にチャレンジしようとする児童・生徒
- 友達や異学年と関わることのよさに気づき、積極的に関わろうとする児童・生徒

iv 関わることのよさ、主体となって学ぶことの楽しさを感じ、さらなる活動への意欲をもつ。

iii 認められることを通して、自己有用感、自己肯定感が高まる。

自己肯定感

・自分は価値のある存在だ。

・自分は愛されている。大切な存在だ。

自己有用感

・自分には役割がある。
・役に立つことができている。

・自分は、必要とされている。
・みんなが自分を認めてくれている。

ii 役割や責任を感じつつ、学びや行事に取り組む。

i 様々な人と関わりをもつ
(児童・生徒が主体となって取り組むことができる授業や異学年交流の推進)

- ① 小・中の教師のつながり
 - ・ 小・中合同研修会
 - ・ 小・中合同教科領域部会
- ② 児童・生徒のつながり
 - ・ 授業での交流
 - ・ 行事での交流
 - ・ 小・中合同での行事実施
- ③ 教師と児童・生徒のつながり
 - ・ 小・中合同長縄大会
 - ・ チャレンジ中学校生活等

仮説③

多様なつながりを創り出す機会の創造

- ① ジグソー法の要素を取り入れた主体的・対話的で深い学びの推進
 - ・ ジグソー法の要素を取り入れることにより、一人一人に役割や責任をもたせ、皆が活躍することができる場を設定する。
 - ・ ジグソー法の要素を取り入れることにより、他者から認められる喜びを感じさせることで、自己有用感、自己肯定感を高め、学びへの意欲へつなげるようにする。

仮説①

役割や責任をもたせ、皆が活躍できる授業の創造

- ① 自己有用感、自己肯定感を高める児童会・生徒会活動
 - ・ 「したい」「やってみたい」との気持ちを大切にした児童会・生徒会活動
 - ・ 上の学年が課題を見つけ主体的に企画、運営する児童会・生徒会活動の推進
 - ・ 学年をつなぐ異学年交流の推進
 - ・ 児童・生徒の頑張りを認める、称賛する場の設定

仮説②

主体的な児童会・生徒会活動等の異学年活動の推進



小・中の教師のつながり

小・中合同研修会

小・中の教師同士のつながりをつくるため、小・中における様々なつながりづくりの考えを共有するため、その2つを目的とする小・中合同研修会を行った。ジグソー法についての学び、小・中のつながりづくりについての学び、研究授業を通した学び等に関する話し合いを元年度に3回、2年度に5回実施した。



小・中合同教科領域部会

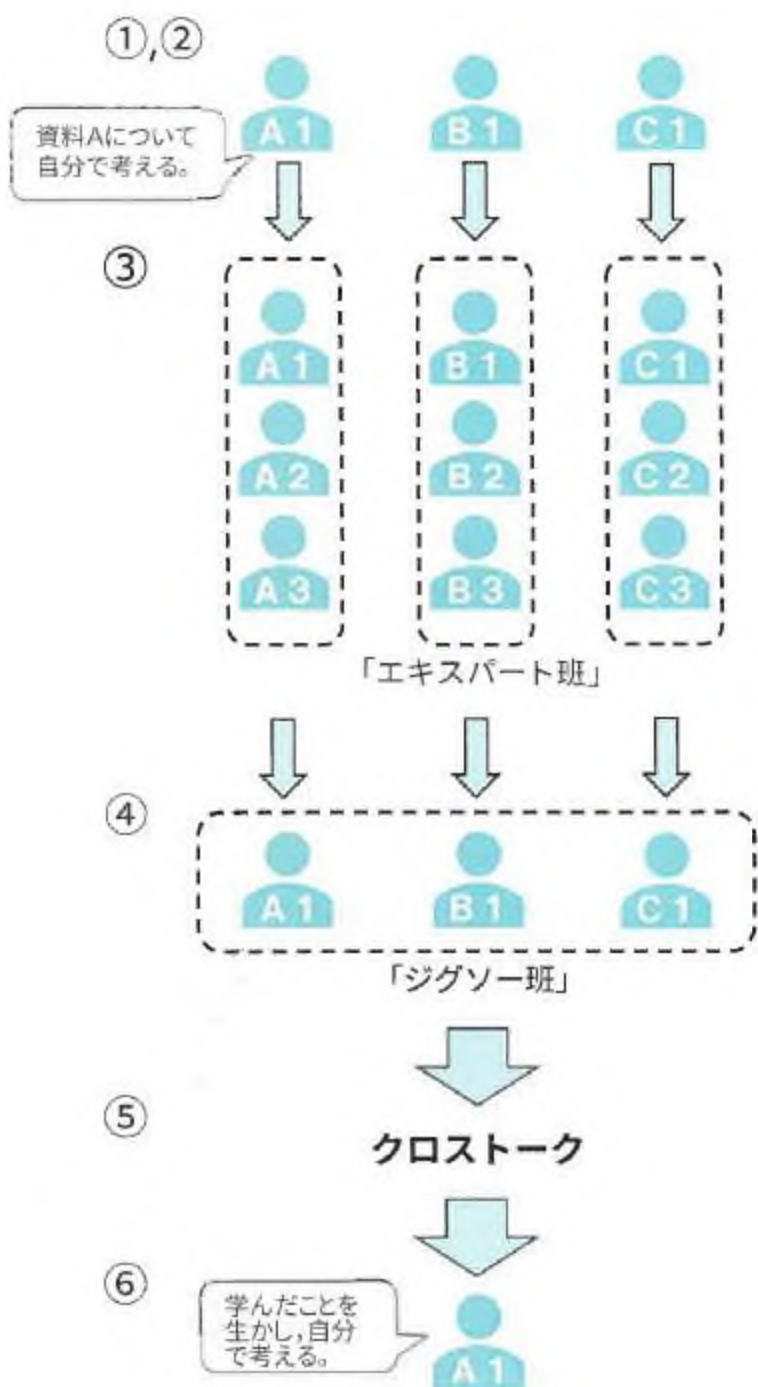
小・中合同研修会を基盤として、さらなる教師同士のつながり、小・中における授業のつながりを構築するために、小・中合同教科領域部会を設定した。教科領域部会毎にテーマを設定し、それぞれの校種において1本ずつ研究授業、授業研究を行うという授業実践を通した研修を行った。ジグソー法の要素を取り入れた学び合いの授業を小・中どちらも実践することで、授業のつながりを構築するとともに、それぞれの校種の学校、児童・生徒の様子を知る機会、授業の違いを知る機会、同じ教科の教師のつながりづくりの機会とすることができた。小・中合同教科領域部会は下記の内容で実施した。

回	内容
第1回	部会の研究テーマ、活動計画の話合い
第2回	授業内容、指導案等の検討
第3回	小学校での授業、授業研究
第4回	中学校での授業、授業研究
第5回	部会の活動のまとめ作成
第6回	活動のまとめ発表、交流

授業のつながり

知識構成型ジグソー法の要素を取り入れた授業

めざす児童・生徒像実現のため、小・中でジグソー法の要素を取り入れた授業を共通して実践することとした。ジグソー法のメリットとして、①児童・生徒が学びの主体となる。②自分で考え、表現をさぐり、判断することができるようになる。③一人一人に役割があることで、全員が参加し、学び合うことができる。④聞く力を育て、多様な考えに触れることができる。⑤主体的で対話的な学習の学び方を学ぶことができる。⑥一人一人が友達に教える場が設定され、互いに学び合い、課題を解決することができる。そのため、学びに達成感があり、互いに認め合うことができるため、自己有用感を育てることができる。これらのメリットから、現在求められている「主体的・対話的で深い学び」を実現することができるとともに、授業の中でも、友達同士のつながりをつくり出し、自己有用感を高めることができるのではないかと考えた。



進め方

- ① 課題を設定する。
- ② 課題に対して、A, B, Cの3つの資料を設定し、児童・生徒が一つずつ分担する。分担した資料について自分で考える。
- ③ 同じ資料を考える者同士で3人のグループ（エキスパート班）を作る。どのように考えるか話し合う。また、後のジグソー活動においてどのように説明するとよいかについて話し合う。（エキスパート活動）
- ④ 違う資料について考えた者同士が一人ずつ集まったグループ（ジグソー班）を作り、自分の分担した資料について説明する。分からないところは質問し分担した以外の資料についても理解を深めたり、説明ができたりするようにする。（ジグソー活動）
- ⑤ ジグソー活動で得られた考えを発表し、他のグループの考えを聞く。（クロストーク）
- ⑥ 学んだことを生かして、適応問題を解く。

児童・生徒のつながり

小・中による長縄エイトマンの取組

小学6年の児童と中学1～3年の生徒による合同での長縄大会を企画した。大会までに、それぞれの学校で長縄エイトマン（長縄8の字跳び）の活動に取り組んだ。小学校では、黒潮カップと称して、全校体育の時間に長縄大会を実施した。また、6年生による1年生への長縄指導を行い、異学年交流を通じた自己有用感、自己肯定感を育成する機会とした。

小・中合同長縄大会は、大会当日の天候により熱中症予防の観点から行うことができず、中学生のみの大会を実施した。



運動会応援団の交流

小・中の応援団同士の交流を行った。それぞれが応援、演舞を披露し合い、感想を交流した。小学生は、中学生のレベルの高い応援や演舞を見せてもらうことにより、自分たちの応援への意欲を高めることができた。また、小学生の演舞を見た中学生も刺激を受けたようで、小学生へ思いのこもった称賛の言葉やアドバイス等があり、小学生にとって中学生の素晴らしさを感じる機会となった。



チャレンジ！中学校生活

中学校入学前に、小学6年児童が小学校の担任と共に中学校生活を体験するものである。入学前に児童が中学校の生活について知ること、また、中学校の教師が入学前の児童の様子を知ることが目的としている。中学校3年が卒業した後の教室を使用し実施する。小学校担任が中学校にて通常の授業を行い、いくつかの授業においては、中学校教師が授業をすることで中学校の授業体験を行う。期間は3日間で3学期に実施予定である。

中学生による夏休みの宿題指導

児童・生徒のつながりづくりと学力向上を目的として実施した。小学生の夏休みの課題の分からないところを中心に中学生が指導した。中学生は、友達や先生と相談しながら、真剣な表情で小学生に教えていた。また、中学校の部活の話や先輩後輩等の人間関係についての話、中学校の先生の話等について交流する姿が見られ、6年児童にとって中学校についての情報を得ることができた貴重な交流の機会となった。

生活科の授業における交流

小学校2年の生活科「うごくうごくわたしのおもちゃ」の学習において、中学生がおもちゃづくりを指導した。児童が目指す完成図通りにおもちゃを作ることは難しく、教師に助けを求めることが少なくない。そこで、中学生が指導する機会とすることで授業における児童・生徒のつながりづくりを目指した。実施後の感想では、中学生から「今までは、自分は教えられる立場だったが、教えてみて先生たちの力はすごいと感じた。」「教えるのはとてもやりがいがあった。また教えたい。もう少し上手に教えられたのではないかなと思う。」等が挙げられ、教えることを通して新たな気づきを得ることができていた。



各学校による異学年のつながり

小学校

全校ウォークラリー

児童会の企画・運営による「全校ウォークラリー」を行った。児童総会において「他の学年と交流できる楽しいイベントを考えよう」を議題に話し合いが行われた。その後、ルール・係・運営方法等を代表委員会で決定し、役割を全委員会に割り振り、運営まで児童が主体となり実施した。実施後の6年児童の日記には、「1つ1つ自分たちで企画したので達成感がありうれしかった。」「他学年の人と関係性を深められる楽しさを感じた。」等の記述が見られ、自分たちで企画・運営することが自己有用感や自己肯定感の育成に大きく関わったことが感じられた。2学期には、児童会の企画・運営によるミニプロジェクトと称したイベントを実施する予定である。

日常生活の中でのつながり

日常生活の中においても、異学年活動を取り入れた。6年生による、朝の体力づくりの時間を使った1年生への長縄エイトマンの指導。5年と6年の長縄対決。1年と6年、2年と4年、3年と5年の組み合わせで行った遊びを通じた関わりでは、学年に応じて遊びの内容の決定や連絡、会の進行等を自分たちで企画・運営させるようにした。また、掃除留学と称した掃除での交流を行った。



中学校

長縄エイトマン

体のつながりの一環として昨年度から長縄エイトマンに取り組んでいる。今年度は早い段階から各学級に長縄が配付され、体育の時間や昼休み・放課後の時間に学級ごとの練習を重ねてきた。各学級の最高回数が更新されると掲示に反映されるため、競い合いが生まれた。長縄大会の運営は、生徒会を中心としており、ルール確認・説明は生徒会保体部が行った。長期に渡り取り組んだ結果、9月の体育大会では大幅に記録が伸びた。

生徒会活動

本部と生活部による朝のあいさつ運動、学習部によるテスト対策作成、文化部による卒業入学メッセージの作成、美化部による学級園の手入れ、保体部による体育大会の運営、ボランティア部による朝の清掃活動等が挙げられ、昼休みや放課後の話し合いにより運営されている。話し合いにより内容は毎年変わるが、コロナ禍により生徒会活動も大きく変更を余儀なくされた。生徒総会も各学級に生徒会役員が赴いて説明する等、制限の中にも生徒の工夫が活かされた形で実行された。



実態調査より

自己有用感の変容

自己有用感尺度（質問紙）と分析ツール（栃木県教育センターのホームページに掲載）を利用し、自己有用感（クラスの中、先生との関わり、家庭との関わり）の3つの中での自己有用感に関する実態調査を行った。また、自己有用感の基盤となるそれぞれにおける関係性についても調査を行った。調査の結果については、下記のとおりである。



① 小学6年生の変容（5年1学期～6年2学期）



② 中学生（1～3年）の変容（元年度2学期～2年度2学期）

